

NEWSLETTER No.105 **TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ**
ISSN 1340-5578 The Society for Research in Asiatic Music January 15, 2019

一般社団法人
東洋音楽学会 **会報** 第**105**号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail: LEN03210@nifty.com ●ホームページ: <http://tog.a.la9.jp>

目次

新会長挨拶	1	ICTM (国際伝統音楽学会) に関するお知らせ	13
第69回大会レポート	2	ICTM 東アジア音楽研究会シンポジウムの参加報告	13
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	11	会員異動	13
臨時理事会議決事項のお知らせ	11	図書・資料等の受贈	15
会員の受賞	11	新刊書籍	16
第36回田邊尚雄賞アンケートのお願い	12	新発売視聴覚資料	16
会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ	12	編集後記	17
東日本支部からのお知らせ	12	第7回定時社員総会議事録(抄)・添付書類	18
沖縄支部からのお知らせ	13		

新会長挨拶

2018年11月12日の臨時理事会で今期の会長に就任いたしました植村幸生です。

のっけから個人的な話を申し上げて恐縮ですが、私が本学会に入会したのは卒業論文を書いている途中の1984年11月ごろだったと記憶しています。もっとも、それ以前から学会の例会をしばしば「もぐり」で聴きに行っておりました。初めての口頭発表、初めての査読論文発表は、いずれも本学会でさせていただきましたし、現在に至るまで、自分の大切な仕事はつねに本学会を通じて成果を問うてきました。さらに研究発表だけでなく参事や理事として多くの社会勉強をさせてもらったことも確かです。私にとって東洋音楽学会は、研究者としても社会人としても自分を育ててくれた、いわばもう一つの学校のようなものです。

入会当時どころかつい最近までも、自分が会長になる日が来るなどは、思いもしませんでした。いま就任の時を迎え、これからは自分が受けてきた学恩に少しでも報いる気持ちで、とりわけ若い世代の研究意欲を促進し、研究活動を応援していきたいと考えております。しかし、そのことは本学会を支えてこられた諸先輩のお力なしにできることではあり

ません。あらゆる世代の研究者がともに集っていること、そして学問細分化の流れのなかである種の総合性を維持していることは、本学会のよき伝統であり持ち味ともいえます。まことに僭越ではありますが、諸先輩がたには、本学会のそうした特性を生かして、学会の機能としての後継者育成にぜひともご協力を賜りたく、ここにお願いを申し上げます。数年前に一般社団法人への移行が完了しました。これは80年に及ぶ本学会の歴史のなかでも大規模な制度上の変更でありましたが、役員および一般会員の皆様のご尽力により、移行後も本学会の運営は順調になされております。しかしながら情報化、国際化への対応、長期的ビジョンにたった研究活動の推進・支援といった面に課題を残してもあります。こうした課題に対して、役員の一員として解決に取り組んでまいりますが、引き続き会員各位には、活発な学会活動を支えるための運営にご協力をいただきたく存じます。どうぞよろしくお願いたします。

植村幸生

第69回大会レポート

(2018年11月10日～11日 大正大学)

第1日(11月10日)

◇特別企画「菊まつり特別法要」

司会：間正晃也

導師：塩入法道、大正大学学生ほか

爽やかな秋晴れの中、開会に先立って、キャンパス内の「すがも鳴台観音堂」(さぎえ堂)において、花会式「菊まつり特別法要」が行われた。この法要は菊づくりの盛んな地域柄行われている行事ということで、有名な奈良の薬師寺における花会式とは、だいぶ趣が異なっていた。

法要は、仏教学部教授の塩入法道氏(天台宗)を導師に迎え、式(職)衆は大学に所属する天台宗、真言宗豊山派、真言宗智山派、浄土宗、時宗の5宗派の学生出仕によって、執り行われた。各宗派合同で行うことを想定した「大正大学勤行式」に則して行われたが、大会冊子で予告されていた経文類以外に、冒頭では真言声明の奠供(四智梵語)、中心部分の「聖経」では般若心経の後に、観音経(普門品偈)と念仏一會が唱えられていた。

法要全体を振り返ると、各宗派の学生が天台宗の導師に率いられながらも宗派を超えた経文類を中心に違和感なく斉唱していたところが印象的であったが、奠供や導師による表白などの独唱部分、それから木魚で裏拍を打つ「合間打ち」による念仏一會などからは、各宗派の特徴が表れているようであった。

星野和幸

◇公開講演会「声明の実演—天台と真言」

司会：近藤静乃

末廣正栄、新井弘賢、大正大学学生・OB

「声明の実演—天台と真言」と題し、近藤静乃氏の司会進行のもと、末廣正栄氏(天台宗)と新井弘賢氏(真言宗豊山派)の率いる大正大学の学部生、大学院生、卒業生らによって実演された。本来は、礼拝堂で行われるべきところを、解体工事中のため階段教室で行われた。



大正大学の特色を生かし、実演は天台宗と真言宗(豊山派)合同で、両宗派の「大般若転読会」の式次第に則して行われた。

「大般若転読会」は、諸宗派において行われる法会であり、宗派間の儀式上の違いはあるものの、今回の両宗派はともに密教系の宗派であり、類似点が多いため、合同の実演が可能となったのであろう。実演は、諸事情により、導師をたえず、転読を省略して、両宗派の声明を交互に聴かせる形で行われた。そのため、法要の中心部が割愛されたような形になっていた。

当日の式次第を振り返ると、まずは法螺貝の吹奏後、天台宗の入堂讃と真言宗の奠供において、両宗派の四智梵語とそれに伴う鏡・鉞の音を聴くことができた。次いで末廣氏による天台宗の唄(始段唄)に、途中から散華が重ねられた。これは、天台宗の法儀に則しているようだが、重ねられたのは真言宗の散華ということで儀式上異例の形をとった。宗派が異なっているにもかかわらず、不思議に違和感なく聴くことができた。また、その間、真言宗の膝を少し曲げる礼拝法など、宗派特有の所作も見ることができた。

次いで天台宗の諸天漢語讃が唱えられ、本来このあたりから法要の中心部へ展開していくのだが、その後の部分は省略され、真言宗の九條錫杖経が唱えられた。ここでは、特に大会冊子で解説されているような天台宗の優雅さと、真言宗のダイナミックさが一層表れているようであった。最後は、全員で般若心経と総回向によって締めくくられた。実演後は、補足的に末廣氏と新井氏により、両宗派の転読作法の違いと、四智梵語の読み方の違いについての解説がなされた。

全体としては、宗派の垣根を超えて実演されているところが印象的であったが、合わせて声明の宗派間の差異を堪能することができ、有意義であった。

星野和幸

◇公開講演会「大正大学の宗門子弟に対する法儀教育について—天台宗を中心に—」

導師：塩入法道

公開講演では、大正大学教授で信濃国分寺住職の塩入法道氏より、大正大学における法儀教育について天台宗を中心に現状を詳しくお話いただいた上で、大正大学の法儀教育や地域連携に携わっておられる末廣正栄氏(天台宗)、間正晃也氏(真言宗智山派)、新井弘賢氏(真言宗豊山派)の三人も交えて質疑応答がなされた。講演はプログラムに掲載された要旨や当日配布された資料に即しつつも逸話等を交えながら進められ、一般人にも理解しやすい充実したものであった。

僧侶の養成は大学制度よりはるかに長い歴史をもっている。そのため現在も宗派ごとにそれぞれの制度があり、住職・副住職となる最低条件である教師の任命はあくまで宗派で行うもので、大学は補助機関の位置付けとの事であったが、この事は近代以前からの長い歴史をもち、各々の伝承方法をも

つ伝統音楽と大学等の近代以降の制度との関係に通ずる点が多く重ねあわせて拝聴した方も多かったのではなかろうか。

筆者が印象に残ったのは、天台宗、真言宗豊山派、真言宗智山派、浄土宗の四宗派が設立宗派となっている大正大学では四宗派が横並びの科目を設定していること、大学は昔の小僧生活の替わりという面があること、天台宗の60日間の加行を授業日数との関係で続けて行うことができず、大学生の特例として春15日と夏45日に分けて行っていること、地方色が強い葬式の作法は教えていないこと、将来的には大学院における理論を含む法儀カリキュラムを考えていること(現在は大学院には法儀科目はないとのこと)等々であった。

質疑では、間正氏の地域連携の取り組みが紹介された後に、①本山と大学の相違、②女子学生の声域をどのように考慮しているか、③音楽としての及第点はあるか、などの質問がなされ、①は大学では基本を学ぶにとどまる(末廣氏)、②は、まずは定められた音高で練習、女子学生も同じ(末廣氏、新井氏)、③は、出来不出来は個人差があり繰り返し練習することが大事(末廣氏、新井氏)、出席や取り組み方を重視(末廣氏)、音楽大学ではないので及第点は特にない(塩入氏)などの回答があった。

遠藤徹



◇第35回田邊尚雄賞授賞式・受賞祝賀会

第35回田邊賞授賞式は、大会初日の公開講演会に引き続き、大正大学7号館の711教室で行われた。今年の田邊賞は、飯野りさ氏の『アラブ古典音楽の旋法体系:アレポの歌謡の伝統に基づく旋法名称の記号論的解釈』と、榎木亨氏の『日本近世期における楽律研究:『律呂新書』を中心として』の2作に授与された。奥山けい子選考委員長から受賞理由が紹介され(会報103号p.3)、遠藤徹会長から賞状と賞金が授与されたあと、お二人の受賞者それぞれから受賞の言葉が述べられた。飯野氏は、ペリフェリー(周縁)という言葉を使いながら、中東研究の中で音楽研究者は周縁に位置し、また音楽研究の中では中東研究者は周縁に位置する中での思いがけない受賞であったといわれ、博士論文の指導をして下さった中

近東の社会経済史ご専門の長澤榮治氏、研究のためにシリアの伝承歌謡を惜しみなく指導して下さいましたムンマド・カドリ・ダラール氏お二人の恩師の名を挙げて謝辞を述べられた。榎木亨氏は、『律呂新書』について、漢文の読解には山寺三知氏が、音楽面からは遠藤徹氏がアプローチを進める中で、自らは思想論的なアプローチを試みたこと、今回の受賞は、成果が評価されたというよりは、今後への励ましと受け止めていることを挨拶の中で述べられた。

懇親会を兼ねた受賞祝賀会は、60人近くの参加者を得て、本学会の長老金澤正剛氏の乾杯の音頭、公開講演会講師塩入法道氏の、懇親会場となった大正大学の鴨台食堂(おうだいじきどう)の紹介で、和やかに始まった。飯野氏の大学院以来の友人で、数少ない中東音楽の研究者仲間である東田範子氏から、飯野氏の細やかでまめなお人柄がその研究にも反映されていることが紹介され、また中国古典音楽研究者の明木茂夫氏からは、榎木氏のように、中国の文献学、音楽学、音律にかかわる数学、といった三つの領域すべてをこなす3拍子そろった若い研究者の出現を喜ぶ旨の祝辞が述べられた。

薦田治子

第2日(11月11日)

◇研究発表1-A(司会:阪井恵)

音楽能力の文化固有性/通文化性の検証:

第2言語習得研の理論を応用して

発表者:平野悠佳

学校教育において複数の音楽ジャンル学習が普及する一方で、学習理論の体系化が進んでいるとはいえない現状に対し、音楽能力には文化固有性と通文化性の二種があると仮定したうえで、第2言語習得研究の知見を応用し、複数の音楽ジャンルを学習する際の音楽能力モデルの全体像把握を試みた意欲的な内容であった。フロアからは、教員養成課程や学校教育に携わる教員らから、複数の音楽能力の習得過程や到達点(第1、第2と順次学習を進めてゆくの、多様な音楽に親しむ能力の育成を重視するのか)を探るための参考として言語習得研究の詳細(対象年齢層や具体的事例)についての質疑や、音楽の授業の目的は「負の転移」(音色等に対する美的感覚の左右といった先に習得した体系による負の影響)の克服に異文化理解としての意味があり、手段としての言語習得とは異なるとの指摘があった。現場との連携を説く助言もあり、それによる研究の進展が期待される。

佐藤文香

「音のない音楽」の記号論

—音楽参与者としてのろう者の位置づけをめぐる—

発表者：土田まどか

「音楽とは何か」という根源的な問いに対し、ろう者という「内的文脈」の異なる他者が「音楽」として表現するパフォーマンスに注目し、記号の観点から音と音以外の要素を中立に考察することで取り組もうとした発表で、ハースの記号論、ナティエの音楽記号学、ヤコブソンの詩的機能等を参照し、聴者とうろう者が共に創造的に参与する音楽世界を考えるための道筋が丁寧に示された。フロアからは、ろう者と聴者が合奏に取り組んだ授業で指揮者に合わせるのではなく身体の動きをどうするかという創意工夫がみられたとの意見や、扱った記号論が古典的であるという指摘、何を「音楽」とするかの定義をめぐる質疑等があった。前回発表で扱った論文(Maler 2015)内の議論(聴者による手話歌が誰でも再現可能であるという意味で演ずる身体の代替可能性が想定されているのに対し、ろう者のそれは当人の身体と不可分(86~7頁)も、今後の研究の深化の鍵となるだろう。

佐藤文香

◇研究発表1-B(司会：金光真理子)

ノルウェーの民俗楽器ハーディングフェーレの伝承

—民俗音楽舞踊コンペティション「ランズカップライケン

への参与観察を通して—

発表者：酒井絵美

ノルウェーのランズカップライケンは19世紀末に始まった民俗音楽と舞踊のコンペティションで、6月末からの5日間、場所を変えて毎年開催される。ノルウェー伝統音楽舞踊協会に加え、開催地の音楽・舞踊グループが主催者となる点が特色でもある。個人演奏、アンサンブル、ダンス、楽器製作の部門があるが、元々はハーディングフェーレのコンペとして出発した。発表者は5度のノルウェーでの現地調査、2回目のコンペ参加を経て「コミュニティの一員となった」と考え、当事者の立場で観察した。その経験から、地域が重んじてきた音楽表現こそを「伝統」と見なす傾向にあるが、複数世代が一緒に参加することで世代がうまく循環し、また地域が移ることで不平等さが少ないと結論づけた。フロアからの質問にもあったように、都市やアカデミズムとの関わり、コンペに供する曲をどう構成するかという細部への言及がもっとあれば、このイベントの独自性と果たした役割がより明瞭に理解できたであろうと感じられた。

横井雅子

グローバル時代の宗教歌謡がもつ可能性

—ゴスペルとキールタンの比較から—

発表者：小尾淳

本研究は、宗教音楽としての側面を保ちつつ世界規模で受

容されるゴスペル音楽とインドの宗教歌謡キールタンを比較考察し、特に「越境」先における新たな受容状況に着目している。発表者は①ボーダーレス化があるとはいえ、他者性の強い宗教歌謡が受容されるということはどう理解するか ②目的が「信仰」でない実践者は宗教歌謡にどんな価値を見出すのか、という問題意識を中心に据えた。考察を通し、グローバル時代の宗教歌謡には普遍的な価値が認められる一方で個々に委ねられた解釈によるメリットが期待されること、現代的なニーズを満たす可能性のある音楽文化として今後も受容の拡大が予測されると結んだ。

歴史も背景も全く異なる二つの比較は興味深いですが、ゴスペルは先行研究に基づいたもの、キールタンはカナダでの調査が中心であり、前述の結論を導くためのより多くの事例が欲しいと感じた。フロアからの質問とやや齟齬があったのも、それに答える蓄積がやや少ないことに起因していると感じられた。

横井雅子

◇研究発表1-C

[セッション]

ベトナム中部高原バナ族のゴングセットの音階と

演奏形式、調律

発表者代表：柳沢英輔

発表者：柳沢英輔、櫻井直樹(非会員)

桜井真樹子(非会員)

本共同発表は、ベトナム中部高原で用いられるブローン及びブロンと呼ばれる二種類のゴングセットの音階に関する研究成果の報告である。まず代表の柳沢氏が登壇して問題意識と手法について概説し、発表目的がコントゥム省バナ族のゴング音楽における音階と演奏形式の解明にあることを述べた。次に櫻井氏が、音響学的解析から明らかになったゴング調律のあり方を報告した。櫻井氏によれば、平ゴング10枚とこぶ付きゴング5枚からなるブローンの調律前後の音を解析した結果、それらが整数倍音でないことが明らかになった。また、平ゴング10枚の音程関係の精査を通して、第二倍音が基音として措置し得ること、それぞれの基音が1オクターブと完全5度によって関係づけられること、そこでは音階が平均律とは異なるやり方で構成され、ひとつのゴングセットの中に2.0倍と2.06倍の2種類のオクターブが存在することなどが明らかにされた。さらに櫻井氏は、複数村のゴングセットについて同様の結果が得られたことから、平ゴングの音階が何らかの方法で伝承されている可能性を示唆した。次いで登壇した桜井氏は、音楽学的観点から研究成果を報告した。バナ族のゴングには、タリア・ブロンとタリア・ブローンと呼ばれる二つの音階がある。桜井氏は、葬送曲と水牛供儀曲という楽曲の分析により、ゴング音楽の形式的特徴を示した。桜

井氏によれば、葬送曲では一定のリズム・パターンが維持され異なる音階への遷移が繰り返されることで楽曲が構成される。他方、水牛供儀曲では転調が認められず3種類のリズム・パターンが織り交ぜられることで楽曲が構成される。また桜井氏は、平ゴングの和音に、主旋律を誘導する和音と、単に共鳴を生じさせる和音がある点を指摘した。最後に柳沢氏が、共同研究の今後の課題として、隣接する他の少数民族との比較、調律の身体技法についての調査、鑄造ではなく鍛造によるゴング製作の調査などの必要性を挙げた。その後の質疑応答では、平均律やオクターブ、音階や旋律といった音楽学的用語法に過度に依存せず、例えば「うなり」といった直観的要素や現地語概念への着目をうながすコメントがなされた。また、ピアノ調律の技法との比較、ゴングの形態に関する定説への示唆について質疑が交わされた。本共同発表は、民族学、音響学、音楽学の観点から交差する共同研究の豊かな可能性を示唆するものであり、今後の展開が大いに期待される。

佐本英規

◇研究発表2-A(司会:井上登喜子)

雑誌『三曲』における尺八の宗教的イメージ

発表者: マット・ギラン

本発表は、戦前に刊行された音楽雑誌『三曲』(1921-1944)に掲載された記事を分析し、尺八に対する当時の宗教性あるいは精神性の有り様を考察した内容であった。普化宗や虚無僧、行脚、精神、宗教、修行、竹(尺八)道といった、尺八と宗教の関連性を直接あるいはそれを連想させる用語を多用した記事の例を、一つずつ具体的に提示する方法で発表が進められた。フロアからは、より広い層に見てもらうために宗教などと絡めた内容が書かれたのか、また、戦後は尺八に禅のイメージを意図的に絡めたところがあるが、戦前も尺八に宗教イメージをあえて重ねたのかという質問があった。それに対し発表者から、戦争や事件が様々に起こる中、社会的な宗教概念を反映する形で『三曲』の記事内容が受容されたともいえるだろう、また、大正・昭和初期はとくに、本来の尺八と宗派の関係から離れた外来の宗教概念(音霊など)を反映した動きが強かったと回答があった。

長嶺亮子

メディアを通じた近代琵琶楽

—1930~40年代におけるレコード発売を中心に—

発表者: 曾村みずき

発表者によれば、明治後期から昭和初期に近代琵琶が流行した背景には、新流派の設立や音楽内容の発展といった近代琵琶そのものの変化のほか、レコードやラジオといった新しいメディアの台頭とその影響が多分にあるという。本発表は、1930~40年代におけるレコードの発売状況から当時の近

代琵琶楽の動向を明らかにしようとするもので、分析と考察の結果、この時期における近代琵琶レコードの発売は、レコード会社・琵琶界・国家情勢のそれぞれの動向が絡み合っており、収録内容や発売状況に影響を与えたという結論が導き出された。フロアからは、同じ内容で複数のレコード会社から発売することのメリットについて質問があり、それに対し発表者からは、人気演奏家の吹き込みを聴きたいという欲求に応えられたのではないかと回答があった。また、他の邦楽のレコードと比較して琵琶だけに見られる特別な事象はあるか、との質問に対し、流派の多い琵琶では、レコードの制作発売の際にも不均衡が生じないよう配慮がなされていたととれるレコード解説がある、と述べた。

長嶺亮子

大正時代の楽譜出版—セノオ楽譜を中心に—

発表者: 越懸澤麻衣

発表者は、楽譜をその時代の音楽活動の実態を反映するメディアと捉え、日本における洋楽受容を考えるために不可欠な存在とする。本発表では、大正時代に人気を博したセノオ楽譜の事例を通じ、大正時代に出版された楽譜の多くは舞台上演やレコードなどで既に知られた作品であったり、邦人作曲家の新曲紹介の役割を果たしていたことが報告され、大正時代の楽譜出版が同時代の音楽界と密接に結びついていたことを示した。フロアからは、セノオ楽譜の内容に関する質問が複数あり、関心の高さをうかがわせた。まず、誰が解説を書いていたのかという質問に対し、解説がある場合とない場合があるが、解説がある場合は妹尾幸陽が書いたものと、外国曲の歌詞の訳詞者(堀内敬三など)が書いた場合もあると回答があった。また、大正期の楽譜印刷の状況について質問があり、発表者からは、日本で作られた楽曲の楽譜が新たに作られる一方で、外国曲に関しては外国版の楽譜をそのまま複製して用いることもあったという事例が示された。また、セノオ楽譜で合唱曲がどの程度出版されていたかという問いに対しては、主は独唱曲のため合唱曲の数は少ないものの若干あり、編曲もそのや歌劇の合唱部分をそのまま用いたものなどがあったと答えた。

長嶺亮子

◇研究発表2-B(司会:島添貴美子)

佐賀県における浮立系芸能の伝承

—「南片白の浮立」と「母ヶ浦の鉦浮立」を事例に—

発表者: 古澤瑞希

古澤氏の発表は、佐賀県内に伝承される浮立系芸能のうち、音高の異なる鉦を組み合わせて演奏する芸能8件を対象とし、鉦のリズムパターンの分析や曲目の一覧、分布状況などを明らかにしたものであった。リズムパターンについては、24拍・16拍・8拍のパターン、中声部の特徴的な動き、特定のパタ

一の有無という三つの要素があることが、作成した楽譜や表によって示された。曲目については、「だんぎー」または「だんぎり」と称する曲が近接地域の3件に共通して演奏されていることなどが示された。現在修士課程の2年生であり、今後、同テーマにて研究を続ける予定とのことであった。

会場からは、「浮立」という表記、道行きの際の鉦のたたき方、鉦の口唱歌の覚え方についての質問や、発表の仕方や今後の研究の進め方についての助言などがあった。

肥前地域に多種多様な鉦の芸能が伝承されていることは興味深く、その音楽構造を分析した研究は貴重なものと思われる。修士論文の完成を期待したい。 高瀬澄子

誰のための「盆踊り」か

—沖繩における「盆踊り」が果たした役割—

発表者：遠藤美奈

遠藤氏の発表は、エイサーと盆踊りが混在する現在の沖繩の状況を背景として、戦前から戦後のアメリカ統治初期にかけて、「盆踊り」をめぐる沖繩の人々が自らのアイデンティティをどのように形成してきたかを明らかにしようとしたものであった。戦前については、1941年に石垣市登野城において本土式の「盆踊り」が行われたこと、一方でアングマーの取り締まりと再評価があったことが示された。戦後については、寺院主催による盆踊り大会の登場、琉米文化会館主催によるエイサーコンクールの開始と盆踊りや各種の芸能との混在の状況などが示され、背景として、ハワイから帰還した日系二世による影響の可能性が指摘された。

会場からは、エイサーの地域性や方言撲滅運動との関係、ほおかむりの取り締まりとその政治的背景、宗教的アイデンティティに関する質問などがあった。

研究の対象として、何を取り上げてきたかではなく、何を取り上げてこなかったかを問題とした視点は、他の研究にとっても参考となる。 高瀬澄子

芸における清楽の影響—長崎花街の月琴演奏を中心に—

発表者：中原逸郎

中原氏の発表は、長崎などの花街における清楽の影響を、主に月琴の演奏を中心として明らかにしようとしたものであった。会場では、19頁に及ぶ冊子が配布され、『さのさ』の資料が閲覧された。最初に、長崎の月琴演奏の録画が示された。写真や楽譜資料、長崎の芸妓への聞き取りなどにより、清楽の普及とその変容の過程が示され、清楽は花街の美意識である「粋(すい)」なものと考えられていたが、次第に大衆化していったこと、日清戦争後に急に衰退したわけではないこと、現在の長崎における清楽の伝承に関する課題などが指摘された。最後に、清楽の変容についての補足として、20年ほ

ど前の「さのさ」の録画が示された。

会場からは、長崎からの伝播の経路や月琴と三味線との共存の仕方についての質問、琉球語として引用されている語への疑義の指摘などがあった。

一般に「明清楽は日清戦争を機に衰退した」と言われていることについて、記録者は漠然と疑問を感じていたので、発表中の指摘に興味深く聴いた。 高瀬澄子

◇研究発表2-C

〔セッション〕

唱歌でつなぐ研究・演奏・教育

発表者代表：寺田己保子

発表者：小塩さとみ、加藤富美子、川口明子、薦田治子、
猶原和子、中村仁美、山下正美

学校教育における我が国や郷土の伝統音楽の指導充実が叫ばれて久しい。平成10年には中学校での和楽器指導が必修化され、平成29年公示の新学習指導要領ではその指導において適宜、口唱歌を用いることが示された。本研究は、日本の伝統的な口頭学習方法であり、口頭性と書記性の中間の役割をもつ「唱歌」を、いかに学校での日本伝統音楽の指導に活用するかに着目した画期的な教育研究プロジェクトである。冒頭の発表では音楽学者の小塩によって、「日本音楽の教育と研究をつなぐ会」発足の経緯や活動内容が紹介されると同時に、同会の具体的な成果として、雅楽・能・箏曲・長唄・祭囃子が教材化されたDVD資料の特徴について、学校現場での実践映像に沿って説明がなされた。音楽教育学者である川口と雅楽実演家の中村による、雅楽の教材事例に関する発表では、研究者・教育者・演奏者の連携による教材開発が齎した視点として、第一に唱歌の活用によって、子ども達に潜在している模倣する能力を引き出し、音楽のみならず言語や身体活動を伴うことで楽譜に頼らず身体に記憶されること、第二に「代用楽器」の使用による身体動作の経験から、例えば筆筈の塩梅といった音楽的特徴を捉えることにも繋がることなどが指摘された。日本の伝統音楽を授業で扱う上で、楽器が揃っていない点は多数の学校が抱える問題であり、そうした背景においても、楽器がなくても唱歌を用いることで一斉授業が可能となり、また同時に代用楽器の事例は教育現場に新たな発想と視座を与えてくれる。

フロアからの関心も非常に高く、発表後の質疑では多くの質問や感想が挙がった。第二次継承者の育成に関する具体的な計画はあるのかという問いに対しては、今後も活動を維持しながら、DVD教材の有効性に関する検証やワークショップの開催を予定しているとの回答が発表者よりあった。

本研究の意義は、第一に「初めに楽譜ありき」の指導法を見直し、言語活動・身体活動を伴う唱歌に着目することによ

て、学校現場での伝統音楽の学びに新たな可能性を提示した
ことである。また第二に、研究者・演奏者・教育者の連携・
協働であるからこそ、伝統音楽の専門的知識やその実践力・
経験、また子どもの特性や発達に関する知識・経験に裏付け
られた緻密で優れた教材が開発されたことにあるだろう。本
研究は大学の教員養成課程の教員である私のような者にとっ
ても、伝統音楽指導の未来を真摯に考える貴重な契機となっ
た。今後の更なる研究や活動の発展に大いに期待したい。

岡田恵美

◇講演(司会:澤田篤子)

一伝承実唱音に基づいた新仮博士による 『豊山聲明大成』について一

発表者:新井弘順

声明は、口伝により師から弟子へ伝えられるものだったが、
やがて独自の記譜法、博士を生む。しかし、長年の伝承を
経て博士と伝承実唱音との間にはズレが生じた。そのズレは、
師僧と弟子との絆や、法要を共に行う地域や集団の独自性を
意味する積極的な役割も担ってきた。宗門の修行道場や大学
での法儀・声明教育という新たな伝承形態へ移る時代、この
ズレをどう扱うか。「ズレを排除するのではなく、そのまま
認め...両者を共に活かす」(大会プログラム要旨)ための解
決策のひとつとして、真言宗豊山派においては「新仮博士」
が創案され、それをういた『豊山聲明大成』(新井弘順監修、
2006)が出版された。講演では、その刊行の経緯および新仮
博士を中心に「記譜」にからむ諸問題が取り上げられた。

まず、「声明」が舞台芸術として注目されることになる1960
年代後半から1980年代にかけての動きが辿られた。まさに
その渦中にあった氏の言葉は、国内外での公演、前衛作品へ
の参加、そして音楽学的研究の進展などが、「声明」伝承の意
識化、ひいては新仮博士という新たな記譜法創案の背景にあ
ったことをリアルに伝えた。つづいて、博士の変遷が実演を
交えて説明された。新仮博士に依りながら、聴講者も共に
「四智梵語讚」を唱え、相対的な音高関係と旋律線の動きの
イメージが把握しやすい新仮博士の利点を実感した。それは
同時に、微分音的な微細な音高調節や音色といった要素は、
対面での教授でしか伝えられないこと再認識させる体験でも
あった。

「ズレ」を排除しない、という新井氏らの姿勢は、師資相承
という伝承法の重みを知るところから生まれたと思われる。
「四智梵語讚」譜に室町時代に生じた変化を金田一春彦氏は
伝承の誤りと断じ、それが定説になっているが、新井氏は
否定的である。それは伝承の現場からの声であり、新仮博士
の創案は、そのような議論も踏まえて辿りついたものだった。

声明は法儀であり表現芸術の一形態でもある。その両面を

知る新井氏だから可能となった「つたえること・つなぐこと」
についての示唆に富む講演であった。 大内典

◇研究発表3-A(司会:小西潤子)

マルチジャンル楽器の伝承方法としての初心者向け楽曲の記 譜法—三味線に特有の奏法を効果的に伝承する方法の分析を 中心に—

発表者:シュムコー、コリーン・クリスティナ

多くのジャンルや流派を持つ三味線は、口頭で伝承され、
楽譜は大事にされなかった。近代に入り新しい記譜法ができ
たが、それぞれが違うだけでなく、「三味線らしさ」や「見
えない理論」を伝えるに不十分であり、特に初心者や作曲家
には別の記譜法が望ましいことを指摘する。

主な記譜法は数字譜で、最も普及しているアラビア数字横
書きの文化譜、アラビア数字縦書きの研精会譜、そして地歌
の漢数字の縦譜を紹介し、その価値と問題点を分析した。い
ずれも旋律もリズムも明確ではなく、数字の意味が異なり他
ジャンルには適用できないとする。

発表者自身は作曲家でもあり、五線譜ではなく、地歌に近
い縦の漢数字譜で、歌詞の流れを守りフレーズで切る、リズ
ムや技法をはっきり示す、時間を指定せず「間(ま)」をス
ペースで示すなど、独自の工夫で分かりやすく視覚化する
ことを試みている。歌詞をフレーズで切ることは、音楽分析
でも有効であることは、傍聴者も経験している。

時田アリソン

吹禅道場におけるジャポネジダデスの形成

一尺八学習のオートエスノグラフィーを通して一

発表者: 瀬上ラファエル広志

世界的に普及している尺八だが、2010年にブラジルにも非
日本人主催指導の吹禅道場ができた。メンバーは日本的なも
のにあこがれている非日系人である。西洋音楽しか知らず偶
然尺八と出会い、道場に入った日系人の発表者は、それを不
思議に思い、人生が転換することになった。

民族音楽学の一つの反省として生まれたオートエスノグラ
フィーという、自身の体験を記録、解釈、分析し、自分を通
して、環境、社会、音楽の意味を明らかにする方法論をとり、
この経験をジャポネジダデス(ポルトガル語で日本人性)と
いう概念で分析した。少数派の日系人は日本人アイデンティ
ティを守り、多数派のブラジル人は尺八を通してジャポネジ
ダデスを作ることを明らかにした。

会場から、これはユニークな現象ではなく、よくあるの
では、という問いと、米国日系三世の事例では、アイデンティ
ティは守るより、キッカケがあって作るという指摘があった。

時田アリソン

ノエル・ペリが繋いだ日仏交流と能楽受容

—1923年パリの能楽公演を中心に—

発表者：坂東愛子

音楽教師の資格を持ったペリ(1865-1922)は宣教師として1889年来日。1906年に上海そしてハノイへ移住するまで、聖書の翻訳、日本音楽の研究(発表では触れられていないが、ペリの音階論は長い間広く参照された—傍聴者による注)など幅広く活動し、能に興味を持った。1902年還俗。東京音楽学校でオルガン、和声、作曲、フランス語を教えた。教え子に田辺尚雄など。能改良運動にかかわる。在日仏人哲学者C・メートルの力により1921年パリでCinq noh 能五番出版。1922年交通事故で死亡、翌年パリで追悼記念能楽公演が行われた。

この時期は第二次ジャポニスムの時代で、パリにいた画家藤田嗣治など、積極的な日本文化の発信が行われ、詩歌、音楽、幅広い分野の日本文化が紹介されていた。ペリの著書と能の翻訳に加えて、この公演がフランスの能楽受容に大きく貢献したことが詳しく紹介された。詩歌が仏訳され歌曲などに応用されたことが、このような文脈にあったことを教えられた。 時田アリン

◇研究発表3-B(司会：田中多佳子)

現代ロシアにおける民俗音楽文化の継承の諸相

発表者：柚木かおり

国営文化の創出と画一化に強烈な力点を置いてきたロシアにあって、いわゆる農村文化／音楽への対峙の仕方が、1930年代および現代における国家主導の「上からの」変革指向、1960年代の「歌う民俗学者」らによる「内からの」忠実なる農村文化の再現、そして2000年代のアマチュア音楽家のグローバリ・メディアを介した「下からの」活動という三つの相に整理できるとする柚木氏の指摘は、今後の研究にも有効な分析枠とも言え興味深いものであった。フロアからは、1960年代の「歌う民俗学者」らによる「内からの改革」という表現と内実について、またこうした動きに対する体制側の圧力について質問があった。柚木氏からは、「歌う民俗学者」らの姿勢と活動は体制側の意向とは真逆の自発的なもので、この点で「上からの」改革とは言い難いが、「改革志向者側の下からの改革」と位置づけられる可能性があるとの説明がなされた。農村文化／音楽の「消滅の語り」の中で、音楽的観点からその正統性がどのように担保されてきたのかという点についても、ぜひ知りたいところであった。今後の検討を期待したい。 濱崎友絵

ボリビア民族オーケストラのセミプロ・コミュニティ化

発表者：牧野翔

続く牧野氏の発表は、20世紀における「西洋の衝撃」の一事例としても位置づけられるもので、ボリビア民族オーケストラ(「ムシカ・デ・マエストロス」)を例に、楽譜に依拠し

た集団的学習による「音楽リテラシー」の獲得と音楽伝承の関係、さらにオーケストラ内部の社会的・組織的力学が音楽実践にもたらす影響を、通時的、共時的観点から明らかにしようとするものであった。先行研究では未解決であったボリビアの都市音楽の在り様にもかかわる意欲的な研究で、8年間におよぶ参与観察を基盤に、演奏家集団の内部の視点から果敢にアプローチした点をまずは評価したい。フロアからは「コミュニティ」という言葉の使い方とともに、楽団プロデューサーが「コミュニティ」の一員か否か、また読譜教育が日本からの影響ということであるが、その具体的な内容について、さらにオーケストラ結成が社会的要請であったのか自発的なものであったのか等の活発な質問が寄せられた。

濱崎友絵

韓国幼児国楽教育の実態に関する考察

—「ヌリ課程」と国立国楽院の幼児対象事業を対象として—

発表者：山本華子

山本氏の発表は、日韓の比較という観点から、韓国の幼児を対象とした国楽(「伝統音楽」)教育の実態を明らかにすることを旨とするものであった。発表では、おもに韓国における四つの国立国楽院の組織と教授実態について現地調査の結果が報告された。発表中に視聴した創作国楽童謡に対し、フロアからは、その音楽的な特徴や伝来童謡との違いについて疑問が提示された。山本氏によれば、伝来童謡は、いわゆる作者・作曲者不詳の「わらべうた」であるのに対し、創作国楽童謡は公募制で作曲家が国楽院に提出し選定されること、また曲調がたとえポップ調であってもチャンダンなど「伝統音楽」の要素が盛り込まれているとのことであった。韓国における「国楽」や「伝統」の実相とともに、その捉えられ方、公的な扱われ方について日本との相違・類似の観点からの簡潔な説明があると、氏の発表のより深い理解につながったと思われる。今後、両国の保育観や音楽教育の考え方の比較を通して、日本における幼児音楽教育のさまざまな「切り口」が提示されることを期待する。 濱崎友絵

◇研究発表3-C(司会：スティーブン・ネルソン)

近世・近代の伊予大洲における雅楽文化

発表者：山田淳平

山田氏の発表は大名の雅楽または藩の雅楽に関する内容である。この類の事例は今までに報告が非常に少なく、実態が不明である。また、現地資料を調査したという点と、大洲という地が江戸期の雅楽の伝承地としては無名である点からも、氏の発表には注目の価値がある。大洲藩は18世紀前半の第五代藩主泰温から幕末まで財政再建を続けたことが知られる。氏の報告では(1)官費によって演奏体制を整備した、

(1)第十代藩主泰済の支援による唐楽の管絃と舞楽、(2)幕末期の八幡神社祭礼での試楽、日本舞・倭舞(やまとまい)、催馬楽、唐楽曲の道楽(みちがく)、(3)楽譜・楽書の書写経路、(4)奏者は職業として雅楽を伝承する者ではない、等を述べた。会場からの質問に対する回答では、雅楽を伝承した神職は社蔵史料に「楽家」「楽人」と書かれること、その神職に伝授した三方楽人は在京都の他に在天王寺もいる可能性があること、舞楽・国風歌舞の面・装束は現存しないこと、奏者の中には藩主加藤家の親族もいれば身分的にそれ以外の者もいたこと、祭礼の曲目の整備過程は不明であることを述べた。

鳥谷部輝彦

貝原益軒の音楽論—儒学者の音楽思想として—

発表者：中川優子

中川氏の発表は、『養生訓』を以て名を残す貝原益軒(1630～1714)の音楽思想に敢えて焦点を当てて、従来詳細に分析されて来なかった『音楽紀聞』について体系的に詳述した点で、この分野に新たな視野を開く研究であると言える。中川氏は、『音楽紀聞』の本質はその礼楽論よりむしろ雅楽の実践にあり、自らの雅楽に関する紀聞を体験的・実証的に論じた点にあると見なしておられる。会場からは『音楽紀聞』の執筆意図や、その想定する読者に関する質問が複数出され、中川氏からは、刊本ではなく写本で流布したとは言え体系的に著述されており、自らの紀聞や経験を初学者に実践的に伝えることを想定した著作であろうとの見解が示された。按ずるに、例えば中川氏も言及された津市図書館橋本文庫所蔵本は、学者ではない素封家の蔵書家旧蔵本である。そうした蔵書に『音楽紀聞』の写本が収められていることは、それが一般の雅楽愛好家にも向けた雅楽解説書の性質を持っていたことと関連すると考えられ、中川氏の説に首肯するものである。

明木茂夫

近世上方書林阿波屋一統の出版活動について

—明和2年(1765)豊竹座退転期を中心に—

発表者：黒川真理恵

近世上方の版元・阿波屋の出版活動について、黒川氏はこれまで、宝暦～安永期の宮節節段物集、文化～天保期のやりうたの本などをとりあげ、正本や絵巻を網羅的に見るという手堅い手法で検討を続けてこられた。今回は、阿波屋が明和期に義太夫節正本や歌舞伎絵巻の出版に携わったことに注目している。出版物の奥書等をひとつひとつ追うことで、「元祖越前少掾孫」とされる座元の存在が浮き彫りになるという興味深い発表であった。

発表後、明和3年2月の『大坂本屋仲間記録』に、阿波屋が他の版元に対し豊竹座座元との関係をもって歌舞伎絵巻出版

の権利を主張している記述があることをご教示いただいた。出版状況という論旨からはやや外れるかもしれないが、発表内でも言及があれば、「座元の存在が阿波屋の新規参入を力づけた」という考察がより伝わりやすかったように感じた。

阿波屋の多岐にわたる出版活動の背景について、さらなる研究の進展が期待される。

鎌田紗弓

◇研究発表4-A(司会：寺田吉孝)

1960-1970年代のサリドゥマイ(フィリピン北部民謡)の音楽テキスト分析

—フィリピン大学マセダ・コレクション音声アーカイブ調査より—

発表者：米野みちよ

20世紀後半にフィリピン北部で流行した民謡サリドゥマイは基本的に5音音階の民謡で、中にはアメリカ由来の旋律を取り入れた曲もあるという。発表ではマセダ・コレクション所収の1960～1970年代の録音を、1990年代以降の自身の調査資料と比較分析した結果として、五音音階の一本化やダイアトニック化等、機能と声を中心とする西洋近代の調性音楽の影響が指摘され、質疑では変化の背景に植民地時代から続くアメリカ文化の多大な影響がある、と説明された。だとすればこれらの変化はサリドゥマイに限らず、フィリピンの民謡全体に共通の現象なのだろうか。サリドゥマイ特有の左派との結びつきや商業録音の影響はどう位置づけられるのだろうか。継続される資料分析によって、社会と音楽の変化の連動性がより精密に考察されることになるだろう。アーカイブ資料とフィールドワーク資料を併用した研究展開の意義と可能性を再認識させる報告であった。

増野亜子

東京音楽学校の「学徒出陣」を現在に伝え、

後世につなぐための諸課題

—「戦没学生のメッセージ」プロジェクトにおけるアーカイブ構築の実践を通して—

発表者：橋本久美子

東京音楽学校の学徒出陣に関する本格的な調査は、新聞・テレビによる取材を契機として、2015年に開始された。

本発表で提示された同校の学徒出陣を伝える意義は次の3点である。

1. これまで知られてこなかった史実を明らかにできる。
2. 学徒出陣を裏付ける大学文書が掘り起こされる。
3. 男女共学校にも出陣があったことを再確認できる。

本発表では、昭和16(1941)年12月から同20年8月にかけて東京音楽学校に在籍した354名について、入隊者76名、徴集率21%、戦没者11名であったことが明らかにされた。

(ただし、また経過報告の段階で、数字は未確定であるとの

説明が付された。)

質疑では個人情報の扱い方を問う声があった。回答として、ご遺族の了承を得た諸事例が挙げられ、作曲専攻生の習作等も研究用に限定的な公開をしてゆく方向性が示された。

現在、東京美術学校の学徒出陣についても調査が進められている。アーカイブの面でも研究の面でも非常に重要なこれらの調査は、今後の展開がますます注目される。

仲辻真帆

◇研究発表 4 - B (司会 : 久万田晋)

戦後日本における「ジャズ・フェスティバル」の受容と定着過程

発表者 : 加藤夢生

加藤氏の発表は映画『真夏の夜のジャズ』に対する評論を通じて、日本におけるジャズの受容を考察するものであり、具体的には三善晃、黛敏郎、瀬川昌久の 3 者による評論を取り上げ、そこにあらわれた評者の「価値観」および音楽と音楽受容の「場」に対する新しい価値観についての解明を試みるものであった。大筋の流れは比較的わかりやすいものであったが、「研究発表」という枠組みにおいて、論旨が明快であったかどうかは疑問である。たとえば、フロアからの質問で指摘があったが、先行研究についての具体的な言及がなく、仮にジャズの日本での受容に限るにしても、これまでに多く論じられてきたことを一旦整理することが、聴き手への親切かと思われる。生活の中に根づいたジャズの聴取の「場」という、いわば日常性に重きを置いた視点は評価できるものの、その議論が学術的な「場」においてどれほどに有効であるかどうか、丹念な検証が求められよう。今後の研究の発展を期待する。

永原恵三

本土復帰前後の沖縄におけるロック受容とその展開

—A サインクラブと基地内クラブとその周辺を対象に—

発表者 : 澤田聖也

澤田氏の発表は本土復帰前後の沖縄におけるロックの演奏空間および演奏者について比較考察したものであり、具体的には旧コザ市 (現沖縄市) 所在の「A サイン倶楽部」での演奏実践を取り上げ、また「本土志向」の演奏者として喜屋武マリ一、「アメリカ志向」として紫を例にして、復帰前後の変化を述べるものであった。発表の流れは具体的事例に基づき、比較対象の図式もわかりやすく、聴き手にとっては内容を追いやすかったが、演奏空間や「ミュージシャン」の変化は明示されたものの、その変化を示すことで、発表者がどのような論の俎上に本発表をのせたいのかが不明に思われた。旧コザ市における本土復帰前後という歴史上の問題を「学術的に」取り上げるのであれば、その事象を示す資料の説明が必要であ

り、データの扱いに不安を感じた。貴重な資料へのアクセスがあったと想像するが、民族音楽学的なアプローチにも歴史という時間軸の設定は重要なことではないかと思われる。今後の研究の発展を期待する。

永原恵三

◇研究発表 4 - C (司会 : 三浦裕子)

金春禅竹自筆『五音之次第』の記譜法

発表者 : 丹羽幸江

本発表は、まだ解明が進んでいない能の初期の記譜法について、金春禅竹 (1405~1471) の自筆本『五音之次第』を元に追究したものである。現在の記譜法が江戸時代初期に大きく変化した観世流のものに基づいているため、世阿弥 (1363?~1443?) をはじめ初期の記譜法は分かっていない。それは世阿弥の記譜法が備忘録的な性格で、詞章全体に記譜が施されておらず、音楽を再現するのが難しいこと、また、世阿弥の没後起こった応仁の乱のため当時の楽譜が残っていないことなどによるとされる。そこで発表者は、世阿弥の女婿であり、世阿弥の伝書を受け継いだ金春座の太夫禅竹の自筆譜を検討し、禅竹は先行芸能、声明や早歌の記譜法を取捨選択し、さらに禅竹特有の記譜法を取り入れたと結論付けた。声明の呂律や五声などの理論用語、早歌の胡麻、特にリズムをあらわす胡麻に注目。早歌と『五音之次第』の胡麻点には共通点が多く、現行にはない胡麻点も共通していることも挙げている。今後さらに初期の能の記譜法が解明されていくことを期待したい。

加納マリ

一調の歴史的考察 序説

発表者 : 高橋葉子

本発表は、能の略式上演方法の一つ、「一調」が現在の形と異なる時代があったことから、多くの資料を基に歴史的な考察をしたものである。能の演奏様式には謡、舞、囃子による完全な形のものから略式で上演されるものまで様々なものがあり、「一調」は小鼓、大鼓、太鼓のいずれか 1 種類と謡一人との組み合わせで能の一部を演奏することをいう。現在の「一調」は重い習物として気軽に演奏してはならないとされ、打ち物一人と謡一人による緊張感は一騎打ちに例えられる。しかし、発表者によると江戸時代初期から大正時代前期までは「一調」の謡が一人ではなく、数人で行われていたことがさまざまな資料からわかってきた。それは、能上演においては常に謡が主、囃子は従とする伝統的な考え方があり、「一調」では謡と囃子の両者が互角に渡り合うことに抵抗があったためではないかと発表者はまともられた。フロアからの声にもあったように流儀や地域による違いの追究を望みたい。また、貴重で興味深い資料の数々もぜひ公開してほしい。

加納マリ

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2018 年 9 月 29 日 (土) に東京学芸大学小金井クラブにおいて一般社団法人東洋音楽学会の第 13 回通常理事会が、2018 年 11 月 10 日 (土) に大正大学巣鴨キャンパスにおいて第 7 回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細は、後掲の第 7 回定時社員総会議事録 (抄) ならびに添付書類をご参照ください。

1) 新入会員について

理事会において、2018 年 4 月以降に仮承認された正会員 16 名が、会員として正式に承認されました。

2) 平成 29 年度公益目的支出計画実施報告書について

社団法人から一般社団法人への移行が完了するまで提出が義務づけられている公益目的支出計画実施報告書について、平成 29 年度の報告書の内容が承認されました。

臨時理事会議決事項のお知らせ

去る 11 月 11 日 (日) に大正大学巣鴨キャンパス 5 号館 5 階 553 教室において臨時理事会が行われ、理事の役割分担、支部委員、各種委員、参与、参事が以下のように決まりました。また、正会員 4 名の入会が承認されました。

1) 理事

[会長] 植村幸生

[副会長] 野川美穂子

[東日本支部長] 奥山けい子

[西日本支部長] 福岡正太

[沖縄支部長] 小西潤子

[常務理事] 小塩さとみ、久万田晋、田中多佳子、前原恵美、早稲田みな子

[総務] 植村幸生、小塩さとみ、久万田晋 (兼広報)、田中多佳子 (情報委員会担当、兼西日本支部担当)、福岡まどか (田邊賞担当、兼西日本支部担当)

[経理] 前原恵美、早稲田みな子

[広報] 久万田晋 (兼総務)、野川美穂子

[機関誌] 梅田英春、奥中康人、加納マリ

[東日本支部担当] 尾高暁子

[西日本支部担当] 福岡まどか (兼総務)、田中多佳子 (兼総務)

2) 支部委員

[東日本] 井上貴子、金光真理子、金志善、黒川真理恵、越懸澤麻衣、ゴチェフスキ・ヘルマン、佐藤文香、土田牧子、東田範子、福田千絵、森田都紀

[西日本] 明木茂夫、上野正章、梶丸岳、出口実紀、菌田郁、柳沢英輔

[沖縄] 遠藤美奈、古謝麻耶子、長嶺亮子

3) 各種委員

各種委員会 (○は委員長)

[会報編集委員会] 木岡史明、久万田晋、土田まどか、中川優子、○野川美穂子、安原道子、横山洸

[機関誌編集委員会] ○梅田英春、奥中康人、加納マリ、東谷護、前島美保

[情報委員会] 上野正章、岡田恵美、小日向英俊、佐竹悦子、○田中多佳子

[ICTM担当] 早稲田みな子

[藝関連担当] 植村幸生

[80周年関連事業推進委員会] ○遠藤徹、川崎瑞穂、田中多佳子、比嘉舞

4) 参与

酒井諄

5) 参事

[総務] 青木慧、鎌田紗弓、仲辻真帆、久岡加枝、牧野翔

[広報] 木岡史明、土田まどか、中川優子、安原道子、横山洸

[機関誌] 丸山彩

[東日本支部] 鯨井正子、倉脇雅子、齊藤紀子、佐竹悦子、澤田聖也、鈴木麻菜美、曾村みずき、鄭暁麗、増田久未、水上えり子、村山佳寿子

[西日本支部] 井上春緒、神野知恵

[沖縄支部] 多和田真理

会員の受賞

◇川崎瑞穂さん・山本真弓さんが小島美子・藤井知昭記念日本民俗音楽学会賞を受賞

このたび、会員の川崎瑞穂さんの著書『徳丸流神楽の成立と展開—民族音楽学的芸能史研究—』(第一書房、2018 年 2 月) 及び学会での活動に対し、また山本真弓さんの大阪南河内地域の民俗芸能を対象とする継続的な教育実践と研究に対し、12 月 9 日に国立民族学博物館にて第 1 回小島美子・藤井知昭記念日本民俗音楽学会賞が授与されました。

第36回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第36回田邊尚雄賞選考委員会では、同賞の選考にあたり、推薦情報を募集しております。アンケート締切まであと僅かとなりました。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、皆さまからの積極的なアンケート送付を切望いたします。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象: 2018(平成30)年1月1日~12月31日の発行物
アンケート締切: 2019(平成31)年2月1日(金)正午

記入事項: 著者名、書名、発行年月日、発行所名。

なお、論文の場合は、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数も記してください。推薦理由を簡潔にお書き添えいただいても構いません。

送付先: 東洋音楽学会 第35回田邊尚雄賞選考委員会

(郵送) 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3
三春ビル307号

(FAX) 03-3832-5152

(電子メール) LEN03210@nifty.com

選考委員: 寺田吉孝(委員長)、梶丸岳、近藤静乃、配川美加、前原恵美

会費納入のお願いと

大学院生会費割引のお知らせ

1. 会費納入のお願い

2018年9月から新しい年度(2018年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払込下さいませよう、お願い申し上げます。振り込み用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振込ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員: 8000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者: 6000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行 [口座番号] 00160-6-55723

[加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行 [支店名] 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)

[当座] 0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済で会費が納入できるようになりました。学会ウェブサイトのトップページ(<http://togakla9.jp>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧頂くと納入ボタンがあります。オンライン決済はペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済は手数料が発生するため、納入金額は以下ようになります。

正会員: 8350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者: 6280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士課程)・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。

学会のホームページ(<http://togakla9.jp/about.html#7>)でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願い」と学生証のコピーを、また研究生の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願い」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願い」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますので、ご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

東日本支部からのお知らせ

◇定例研究会発表募集(7月例会)

2019年7月6日(土)に開催される東日本支部定例研究会での研究発表を募集しています。

発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、4月30日までに、東日本支部事務局あて、お申し込みください。

なお、発表希望をご提出後 1 週間経過しても事務局からの連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

◇「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法などの詳細は、『東日本支部だより』の最終ページをご覧ください。

〔東日本支部事務局〕

〒110-0005 台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号
東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail : tog.higashi@gmail.com

沖縄支部からのお知らせ

平成 30 年度役員改選により、沖縄支部はこれから 2 年間、下記の支部担当理事、支部委員、参事が運営します。どうぞよろしくお願いいたします。

支部長：小西 潤子

支部委員：長嶺亮子 (会計) 古謝麻耶子 (例会)

遠藤美奈 (例会)

参事：多和田真理

沖縄支部事務所：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付

Tel/Fax 098-882-5016

ICTM (国際伝統音楽学会) に関するお知らせ 第 45 回 ICTM 世界大会のお知らせ

日時：2019 年 7 月 11 日～17 日

場所：Chulalongkorn University

(チュラロンコン大学、タイ、バンコク)

テーマ

1. Transborder Flows and Movements.
2. Music, Dance and Sustainable Development
3. The Globalization and Localization of Ethnomusicology and Ethnochoreology
4. Music and Dance as Language
5. Approaches to Practice-Based Research
6. New Research

発表申し込みは締め切られました。参加申し込みは、2019 年 1 月 15 日以降、オンラインでの受付が始まります。また、仮プログラムも 2019 年 1 月～2 月頃にオンラインで閲覧できるようになります。詳しくは、以下の大会ウェブページをチェックしてください (<http://www.ictm2019thailand.com/>)。

ICTM 東アジア音楽研究会シンポジウムの参加報告

2018 年 8 月 21 日から 23 日、韓国の国立国楽院において、ICTM 東アジア音楽研究会 (ICTM Study group on Musics of East Asia, 通称 MEA) の第 6 回シンポジウムが開催された。今回は「Performing Arts and Social Transitions in East Asia」と題され、名簿によれば幅広い地域から 97 名が参加している。Bell YUNG 氏の基調講演にはじまり、22 組のセッション (個人発表 80 件)、ワークショップ 3 件と、濃密な 3 日間であった。一ジャンルの実態に特化する発表が大半を占めるなか、中・韓・日の太鼓の比較を試みる研究、中韓共同の「古代の太鼓」復元プロジェクトなど、シルクロードを通じた太鼓の伝播に関心を寄せる研究が数件見られたのが、報告者には興味深かった。宮廷音楽「寿齊天 (スジェチョン)」からサムルノリまでという韓国音楽コンサートの充実ぶりも記憶に新しい。

MEA は、所属・対象・方法のさまざまな研究者が、「東アジア」というきわめて柔軟な共通項をもって一堂に会する場である。数百人規模になってしまう ICTM 世界大会にくらべて踏み込んだ意見交換をしやすく、一人一人と交流を深められる研究会ならではの良さがあると感じている。ビジネスミーティングでは、「英語での発表を怖がらず、より規模の大きな学会に参加する足掛かりとして MEA を利用してほしい」という意見も聞かれた。日本からの参加者数自体は決して少なくはないが、顔ぶれは前回とあまり変わらなかったように思う。このような貴重な機会を、より多くの研究者に活用してほしいと感じた。

鎌田紗弓

会員異動

個人情報のため削除

個人情報のため削除

個人情報のため削除

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)、価格(税別)

- 『アートとは何か——芸術の存在論と目的論』
アーサー・C・ダントー、佐藤一進訳、人文書院、2,600円
- 『アジア「歌垣」論(附・中国雲南省白族の歌文化と資料)』
岡部隆志、三弥井書店、9,000円
- 『アドルノ音楽論集 幻想曲風に(叢書・ユニベルシタス1088)』 テオドル・W・アドルノ、岡田暁生・藤井俊之訳、
法政大学出版局、4,000円
- 『アラブ音楽入門——アザーンから即興演奏まで』
飯野りさ、スタイルノート、2,000円
- 『「いやし」としての音楽——江戸期・明治期の日本音楽療法
思想史(日文研叢書)』 光平有希、臨川書店、5,800円
- 『歌神と古今伝受』
鶴崎裕雄・小高道子(編著)、和泉書院、3,000円
- 『英語で案内する——日本の伝統・大衆文化辞典』
森口稔(編著)、ウィリアム・S・ファイファー(英文校閲)、
三省堂、3,500円
- 『絵入謡本と能狂言絵(神戸女子大学古典芸能研究センター
研究資料集2)』神戸女子大学古典芸能研究センター(編集)、
思文閣出版、4,200円
- 『音楽から聴こえる数学『数学の音』43分♪CD付』
中島さち子、講談社、1,700円
- 『音楽クリエイターのためのマイクロフォン事典——名演を
受けとめ続けるレコーディング・マイクの定番たち』
林憲一、DU BOOKS、2,400円
- 『音楽と絵画で読む T.S.エリオット——『ブルロックその
他の観察』から『荒地』へ』 熊谷治子、彩流社、4,500円
- 『音楽と病のポリフォニー ——大作曲家の健康生成論』
小林聡幸、アルテスパブリッシング、2,800円
- 『音楽とリズムと特別支援教育』
齋藤一雄、東洋館出版社、2,500円
- 『音楽ノート(新装復刊版)』 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、
芦津丈夫訳、白水社、3,700円
- 『義太夫節浄瑠璃末翻刻作品集(第五期)』
鳥越文蔵・内山美樹子(監)、義太夫節正本刊行会(編)、
玉川大学出版部、28,000円
- 『芸の心——能狂言 終わりなき道』野村四郎・山本東次郎、
笠井賢一(編)、藤原書店、2,800円
- 『「現代能楽集」の挑戦 錬肉工房1971-2017』
岡本章(編著)、論創社、4,800円
- 『校内合唱コンクール成功への道』
渡瀬昌治、教育芸術社、2,000円
- 『幸若舞の展開——芸能伝承の諸相』

- 須田悦生、三弥井書店、9,700円
- 『古代日本の王権と音楽——古代祭祀の琴から源氏物語の琴へ』
西本香子、高志書院、3,000円
- 『神曲 地獄篇(第1歌—第17歌) 須賀敦子の本棚1』
ダンテ・アリギエーリ、須賀敦子・藤谷道夫訳、
河出書房新社、2,900円
- 『図解 日本音楽史 増補改訂版』
田中健次、東京堂出版、3,000円
- 『誕生から古代・中世の音楽——音楽のあゆみと音の不思議1』
小村公次、大月書店、3,000円
- 『中国の音楽思想——朱載堉と十二平均律』
田中有紀、東京大学出版会、12,000円
- 『伝統芸能ことはじめ(京都芸術センター叢書)』
小林昌廣、京都芸術センター、3,200円
- 『東欧音楽綺譚——クルシソイス・跛行の来訪神・ペトルーシユカ』
伊東信宏、音楽之友社、2,300円
- 『能鑑賞二百六十一番——現行謡曲解題(淡交新書)』
金子直樹、淡交社、1,500円
- 『能と狂言 16——風流の作り物 能の作り物：中世の作り物
文化から能を見る』
能楽学会(編集・発行)、ペリかん社、2,000円
- 『はじめてのアメリカ音楽史』ジェームス・M・バーダマン、
里中哲彦、筑摩書房、940円
- 『バッハ——「音楽の父」の素顔と生涯(平凡社新書)』
加藤浩子、平凡社、920円
- 『バロックの音楽世界——テキスト、画像による新たな体験』
ベルンハルト・モールバッハ、井本响二訳、
法政大学出版局、9,200円
- 『評伝 鶴屋南北(全二巻)(第一巻・第二巻セット/分売不可)』
古井戸秀夫、白水社、25,000円
- 『ヘルダー民謡集』 嶋田洋一郎訳、九州大学出版会、10,000円
- 『ヘルベルト・ブロムシュテット自伝——音楽こそわが天命』
ヘルベルト・ブロムシュテット、ユリア・スピノーラ(聞き手)、
力武京子訳、樋口隆一(日本語監修)、
アルテスパブリッシング、2,500円
- 『民俗伝承学の視点と方法——新しい歴史学への招待』
新谷尚紀(編集)、吉川弘文館、9,500円
- 『謡曲『石橋』の総合的研究』 雨宮久美、勉誠出版、6,400円

新発売視聴覚資料

●CD

- 『唄綵(うたづな)』
神谷幸一・他、ASCD-2013、〔2CD〕、3,200円

- 『杵屋五三魅 長唄三曲糸の調／船弁慶——和のこころを聴く』
(UHQCD) 杵屋五三魅、COCJ-40472、2,315円
- 『Koto Concertos——遠藤千晶／箏協奏曲の軌跡』
遠藤千晶、VZCG-8582～2、4,000円
- 『女性のための琉球古典音楽(入門編)』
小西睦子、KOKU3-0253、2,000円
- 『真言宗豊山聲明 二箇法用付 大般若転読会(2枚組)』
迦陵頻伽聲明研究会、VZCG-8580～1、5,000円
- 『中島勝祐創作賞——第七回那須与一弓矢賞』
鶴澤津賀寿／中島勝祐、VZCG-819、3,000円
- 『平成三十年、三十一年度正派邦楽会准師範試験課題曲集——
箏・三弦 古典／現代名曲集(28)』
中島靖子・他、VZCG-817、3,000円
- 『「松前桜音頭/有田皿山節」全日本民謡指導者連盟選定曲』
小野田浩二、伊東満、COCF-17509、1,200円
- 『琉球古典音楽 安富祖流 昔節の神髄II』
歌・三線／大湾清之、KOKU3-0246、2,315円
- 『老妓抄／米川文子』 米川文子、VZCG-818、3,000円

●DVD

- 『遠藤千晶×日本フィルハーモニー交響楽団 ザ・コンチェルト in
Fukushima』箏:遠藤千晶、尺八:藤原道山、指揮:藤岡幸夫/
日本フィルハーモニー交響楽団、VZBG-60、3,500円
- 『第二十二回日本伝統文化振興財団賞——新内多賀太夫(新
内節)』 新内多賀太夫・他、VZBG-59、3,500円

編集後記

大会報告を掲載した1月号をお送りいたします。発表件数も多く充実した大会でした。報告をご執筆いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

なお本号をもちまして前年度までの会報担当理事・澤田と増野、担当委員の山下、参事の神野が交代いたします。任期中は多くの方々のご協力を賜りました。ありがとうございました。次号からは新年度の理事・参事および留任する参事メンバーからなる新しいチームが任にあたります。今後とも会員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

増野亜子

会報編集委員会

理事:澤田篤子、増野亜子

委員:山下正美

参事:神野知恵、土田まどか、中川優子、安原道子、横山洗

第7回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1.日時:平成30年11月10日(土)17:30~18:30

2.場所:大正大学 巣鴨キャンパス 7号館1階711教室

3.出席者:301名(委任状提出者157名、書面議決書提出者83名を含む)

[備考]正会員567名、定足数284名

4.議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により遠藤徹会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、島添貴美子、高瀬澄子両氏が選出された後、以下の議事を開始した。第2号議案から第5号議案の採決は、蒲生美津子監事による「監査報告書」【添付書類8】の説明の後に行われた。

第1号議案 平成28(2016)年度事業報告の件

加藤富美子選挙管理委員長より「役員選出資料」【添付書類1】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 平成29(2017)年度事業報告の件

小塩さとみ理事(総務担当)より「平成29(2017)年度事業報告」【添付書類2-1】【添付書類2-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 平成29(2017)年度収支決算の件

早稲田みな子理事(経理担当)より「平成29(2017)年度収支計算書」【添付書類3-1】「平成29(2017)年度収支計算書内訳表」【添付書類3-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 平成30(2018)年8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

早稲田みな子理事により「貸借対照表」【添付書類4-1】、「貸借対照表内訳表」【添付書類4-2】、「正味財産増減計算書」【添付書類4-3】、「正味財産増減計算書内訳表」【添付書類4-4】、「附属明細書」【添付書類4-5】、「別紙2 公益目的支出計画実施報告書」について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)

の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 平成30(2018)年8月31日現在会員異動状況の件

小塩さとみ理事より「会員の異動状況(2017.9.1~2018.8.31)」【添付書類5】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第6号議案 その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

その後、小塩さとみ理事が「平成30(2018)年度事業計画」【添付書類6】について、次いで早稲田みな子理事が「平成30(2018)年度収支予算書」【添付書類7】について、それぞれ報告を行った。

また会員から藝術学関連学会連合にはいつまで参加する予定かという質疑が上がり、それについては遠藤徹会長から、現在行っている公益目的支出計画に連合への参加が含まれているため、計画が終わる段階までは参加予定であるという返答があった。続いて、山本華子音楽文献目録委員会派遣委員より、音楽文献目録委員会に関する活動報告が行なわれた。

[第6回定時社員総会 添付書類1]

役員選出資料

1 2018年度役員選挙開票結果

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| (1) 有権者数 | 576名(2018年7月24日現在) |
| (2) 被選挙権停止者数 | 9名 |
| (3) 被選挙権休止者数 | 10名 |
| (4) 投票用紙発送日 | 2018年7月24日(火) |
| (5) 投票締切日 | 2018年9月1日(土) 消印有効 |
| (6) 開票日時 | 2018年9月12日(水) 午前11時より |
| (7) 開票場所 | 東京音楽大学K館K402教室 |
| (8) 開票に立ち会った会員数 | 0名 |
| (9) 投票者数 | 136名(投票率23.6%) |
| (10) 開票結果 | |

1.役員選挙開票結果

①監事

総票数 272票

有効投票数 234票	無効投票数 4票	白票 34
順位	得票数	氏名

の選出者、順位、票数を付記した結果は、最高得票者および会長に報告した。また、その結果は最高得票者を通して選出理事にも知らされた。

定款施行細則第8条に基づき、選挙管理委員会は、理事当選者10名に対して、他の5名を合議することを求めた。合議の結果、奥中康人、奥山九子、加納マリ、田中多佳子、前原恵美の5名が理事として推薦された。

(4票未満省略)

②理事 総票数 1088票
有効投票数 978票 無効投票数 26票
白票 84
順位 得票数 氏名

3. 2018年度役員選任原案

(1)監事 2名

塚田 健一 樋口 昭

(2)理事 15名

植村 幸生	小西 潤子
梅田 英春	田中 多佳子
奥中 康人	野川 美穂子
奥山 けい子	福岡 正太
小塩 さとみ	福岡 まどか
尾高 暁子	前原 恵美
加納 マリ	早稲田 みな子
久万田 晋	

(一社) 東洋音楽学会 2018年度選挙管理委員会
加藤 富美子 (委員長)
塚原 健太 (副委員長)
ツェルゲル
比嘉 舞
平野 悠佳

[第6回定時社員総会 添付書類2-1]

平成29年度(2017年度)事業報告

(自平成29年(2017年)9月1日至平成30年(2018年)8月31日)

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2017年11月11日
- ・会場 沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス
- ・課題1「沖縄民謡のアーカイブ」
- 課題2「三線製作とその伝承の課題(シンポジウムから)」
- 課題3「公開演奏会:歌三線・箏曲・舞踊」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2017年11月12日
- ・会場 沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス
- ・発表件数28件(共同発表、セッションを含む)

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2018年11月10日、11日

2. 選出過程

① 選出方法

理事・監事の選出については、定款施行細則第3条から第13条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいて行なわれた。

② 監事の選出

9月12日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。

③ 理事の選出

9月12日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。これら

- ・会場 大正大学巣鴨キャンパス
 - (4) 定例研究会 (定款施行細則第3条3)
 - 東日本支部
 - ・回数 7回(第99回～第105回 11月、12月、2月、3月、4月、6月、7月)
 - ・会場 東京藝術大学音楽学部・大正大学ほか
 - ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか
 - 西日本支部
 - ・回数 5回(第277回～第281回 9月、11月、5月、6月、7月)
 - ・会場 京都教育大学ほか
 - ・内容 講演、研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
 - 沖縄支部
 - ・回数 2回(第69回～第70回 2月・6月)
 - ・会場 沖縄県立芸術大学ほか
 - ・内容 研究発表
 - [2] 学会誌および学術図書の刊行 (定款第5条2)
 - (5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行 (定款施行細則第3条4)
 - 第83号の編集、刊行 (2018年8月31日発行)
 - ・内容 論文、研究ノート、書評ほか
 - (6) 会報の刊行
 - 『東洋音楽学会会報』
 - ・第101号(2017年9月)、第102号(2018年1月)、第103号(2018年5月)
 - ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、
図書・視聴覚資料紹介、会員消息
 - 『東日本支部だより』
 - ・第45号(2017年11月)、第46号(2018年3月)、第47号(2018年6月)
 - ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
 - 『西日本支部だより』
 - ・第86号(2017年9月)、第87号(2018年3月)、第88号(2018年8月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告ほか
 - 『沖縄支部通信』
第36号改訂版(2018年1月)、第37号(2018年3月)、第38号(2018年7月)
 - ・内容 定例研究会案内・報告
 - [3] 関連学協会との連絡および協力 (定款第5条3)
 - (7) 日本学術会議への協力
 - 日本学術会議協力学術研究団体として協力
 - (8) 音楽文献目録委員会への参加
 - 会員吉野雪子、森田都紀 山本華子の3氏を委員として派遣(～2018年3月)
 - 会員田中美加、森田都紀 山本華子の3氏を委員として派遣(2018年4月～)
 - (9) 国際伝統音楽学会 (ICTM) への協力
 - 日本国内委員会として加盟
 - (10) 芸術学関連学会連合への参加
 - 会員遠藤徹氏を委員として派遣
 - (11) 東洋学・アジア研究連絡協議会への参加
 - オブザーバーとして参加
 - [4] 研究の奨励および研究業績の表彰 (定款第5条4)
 - (12) 「田邊尚雄賞」 (定款施行細則第3条5)
 - 第34回田邊尚雄賞の授賞
 - ・日時 2017年11月11日
 - ・受賞者および授賞対象
大内典『仏教の声と技一悟りの身体一』
(法蔵館、2016年3月発行)
 - 第35回田邊尚雄賞の選考と発表
 - ・受賞者および授賞対象
飯野りさ『アラブ古典音楽の旋法体系：アレppoの歌謡の伝統に
基づく旋法名称の記号論的解釈』
(スタイルノート、2017年2月25日発行)
 - 榎木亨『日本近世期における楽律研究：『律呂新書』を中心
として』 (東方書店、2017年3月31日発行)
- [5] 研究および調査 (定款第5条5)
- (13) 国内または国外における学術調査および研究
とくになし
- [6] その他目的を達成するために必要な事項 (定款第5条6)
- (14) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
- (15) 独立行政法人科学技術振興機構 (JST) 電子アーカイブ
事業への参加
- (16) 学会創立80周年記念関連事業
- (17) 関連企画の後援：ルイス・デラカイエ講演会「アンデスの
伝統管楽器の文化的・技術的指導の教授学」
2018年4月5日 於：求道会館

以上

[第6回定時社員総会 添付書類2-2]

2. 処務の概要

[1] 役員等に関する事項

2017年度(平成29年度)末現在

職名	勤務	氏名	任期(開始)	担当職務	報酬	所属など
理事	非常勤	遠藤 徹	2016/11/5	会長、総務 ※会長就任日は11/6	なし	東京学芸大学
理事	非常勤	澤田 篤子	2016/11/5	副会長、広報	なし	洗足学園音楽大学
理事	非常勤	野川 美穂子	2016/11/5	東日本支部長	なし	東京藝術大学・武蔵野音楽大学・東海大学
理事	非常勤	藤田 隆則	2016/11/5	西日本支部長	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	小西 潤子	2016/11/5	沖縄支部長	なし	沖縄県立芸術大学 音楽学部
理事	非常勤	梅田 英春	2016/11/5	機関誌	なし	静岡文化芸術大学文化政策学部
理事	非常勤	小塩 さとみ	2016/11/5	総務(常務理事)	なし	宮城教育大学
理事	非常勤	ギラン, マット	2016/11/5	東日本支部担当	なし	国際基督教大学
理事	非常勤	小日向 英俊	2016/11/5	総務(常務理事)	なし	青山学院大学、国立音楽大学、洗足学園大学、東京音楽大学
理事	非常勤	高松 晃子 (本姓 南)	2016/11/5	経理(常務理事)	なし	聖徳大学音楽学部
理事	非常勤	竹内 有一	2016/11/5	機関誌、西日本支部	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	福岡 まどか	2016/11/5	総務、西日本支部担当	なし	大阪大学
理事	非常勤	増野 亜子 (本姓 城島)	2016/11/5	総務、広報(常務理事)	なし	東京藝術大学、明治大学商学部
理事	非常勤	横井 雅子 (本姓 片岡)	2016/11/5	機関誌	なし	国立音楽大学
理事	非常勤	早稲田 みな子	2016/11/5	経理(常務理事)	なし	東京藝術大学
監事	非常勤	蒲生 美津子	2016/11/5	監査	なし	沖縄県立芸術大学名誉教授
監事	非常勤	小柴 はるみ	2016/11/5	監査	なし	東海大学名誉教授

参与 酒井諄

支部委員 [東日本支部] 奥山けい子、金光真理子、ヘルマン・ゴチェフスキ、近藤静乃、土田牧子、鳥谷部輝彦、濱崎友絵、福田千絵、福田裕美、伏木香織、森田都紀
[西日本支部] 伊藤悟、上野正章、梶丸岳、武内恵美子、田中多佳子、出口実紀
[沖縄支部] 岡田恵美、高瀬澄子、三島わか

参事 [本部] 五十嵐美香、大久保真利子(～2017年9月)、太田郁、鎌田紗弓、神野知恵、神野由布樹、川崎瑞穂、小林美季子、鈴木麻菜美(2017年10月～)、ツエルケル、土田まどか(2018年4月～)、中川優子、仲辻真帆、久岡加枝(2017年10月～)、平野悠佳(2017年10月～)、彭泓、松本民菜、安原道子、横山洸
[東日本支部] 木岡史明、鯨井正子、倉脇雅子、齊藤紀子、佐竹悦子、曾村みづき、田辺沙保里、田村にしき(～2018年3月)、中村ひかる、宮内基弥、村山佳寿子、吉岡美咲
[西日本支部] 井上春緒(2017年4月～)、竹内直、中安真理
[沖縄支部] 古謝麻耶子

②職員に関する事項

2017 年度(平成 29 年度)末現在

職名	氏名	採用年月日	担当事務	手当	交通費	備考
職員	金子由美子	1997/10/22	事務一般	月額80,000円	実費支給	

③会議等に関する事項

(1)理事会

開催年月日	議事事項	会議の結果
第 11 回通常理事会 2017 年 10 月 1 日 (平成 29)	1. 新入会員承認の件 2. 平成 28 年度事業報告の件(本部および各支部) 3. 平成 29 年 8 月 31 日現在 財務諸表の件 4. 平成 28 年度総括収支決算の件(各支部総括収支決算を含む) 5. 長期滞納者処理の件 6. 平成 29 年 8 月 31 日現在 会員異動状況の件 7. 参事および委員委嘱の件	承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認
第 12 回通常理事会 2018 年 4 月 1 日 (平成 30)	1. 新入会員承認の件 2. 平成 30 年度研究発表大会および公開講演会の件 3. 平成 30 年度事業計画の件 4. 平成 30 年度収支予算の件 5. 第 35 回「田邊尚雄賞」受賞者決定の件 6. 第 36 回「田邊尚雄賞」選考委員選任の件 7. 長期滞納者処理の件 8. 参事および委員委嘱の件 9. 次期理事定数および支部委員定数の件 10. 機関誌投稿規定の一部改定の件	承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 継続審議

(2)総会

開催年月日	議事事項	会議の結果
第 6 回定時社員総会 2017 年 11 月 11 日 (平成 29)	1. 平成 28(2016)年度事業報告の件 2. 平成 28(2016)年度収支決算の件 3. 平成 29(2017)年 8 月 31 日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件 4. 平成 29(2017)年 8 月 31 日現在会員異動状況の件 ・ 平成 29(2017)年度事業計画の件 ・ 平成 29(2017)年度収支予算の件 ・ 職員永年勤続表彰	承認 承認 承認 承認 報告 報告 報告

(3)各種委員会 (○印は責任者)

●会報編集委員会

○澤田篤子、大久保真利子(～2017年9月)、神野知恵、土田まどか(2018年4月～)、中川優子、増野亜子、松本民菜、安原道子、山下正美、横山洗

●機関誌編集委員会

○横井雅子、梅田英春、奥中康人、加納マリ、竹内有一

●情報委員会

○小日向英俊、岡田恵美、佐竹悦子、塚原健太

●第35回田邊尚雄賞選考委員会

○奥山けい子、梶丸岳、加藤富美子、寺田吉孝、吉野雪子

●80周年関連事業推進委員会

○遠藤徹、田中多佳子、川崎瑞穂、比嘉舞

[第 6 回定時社員総会 添付書類 5]

会員の異動状況 (2017年9月1日～2018年8月31日)

(平成29年) (平成30年)

● : 東日本支部、◆ : 西日本支部、■ : 沖縄支部、# : 海外在住

会員種別	会 員 数		増減	異 動 の 内 訳
	2017.9.1	2018.8.31		
正会員	569	565	-4	新入+28、学生より+5、退会-35、逝去-2
学生会員	11	10	-1	新入+6、正会員へ-5、退会-2
賛助会員	3	3	0	
特別会員	9	8	-1	退会-1
名誉会員	1	1	0	
	593	587	-6	

[第 6 回定時社員総会 添付書類 8]

監 査 報 告 書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長 遠藤 徹 殿

平成 30 年 9 月 27 日

(2018年)

監 事 小柴はるみ

監 事 蒲生美津子

私たちは、平成 29 年 9 月 1 日から平成 30 年 8 月 31 日までの平成 29 年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 平成 29 年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 公益目的支出計画実施報告書に関して監査を行った結果、正しく実施されていることを認める。
- (4) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上

